えひめの歴史文化モノ語り

県歴博収蔵資料から ㉑

「犬埴輪」実は炊事具か

土製支脚

この資料は高さ15・3㌢、三角錐（すい）の頂部から以下のように考えられている。三つでワンセットの道具で、炉の中にそれぞれが頂点になるよう三角形に並べる。その上に煮沸具である甕（かめ）を置く。炉から浮かせることで、甕の底部に火を当て加熱にかかる時間を短縮するために使われた。



宮前川北斎院遺跡から出土した土製支脚＝県歴史文化博物館保管

土製支脚には上部が平らなものやとがったものなど、さまざまな形態が確認されている。当資料のような形の支脚は山陰地方を中心に分布するとされ、一緒に出土した土器の種類から古墳時代の初頭に使用されたと考えられている。

当資料が出土した宮前川北斎院（みやまえがわきたさや）遺跡は、松山平野北西部、現在の松山市中心部と三津浜の間に位置する。祭祀（さいし）に関わる遺物が多数出土することや、旧宮前川の下流域にあり瀬戸内海に直結することから、祭祀の場や交易・流通の拠点を担った集落と考えられている。土製支脚は甕と共に大量に発見され、使用の痕跡があることからこの地で生活が営まれたと考える根拠とされた。

遺跡から出土したものは、出土状況のほか形から用途を推測する。そのため当初はまったく違う用途が想定されていたり、見た目のイメージで名前がつけられたりする。土製支脚はその典型例と言える。

（学芸員・三浦彩）

〈随時掲載します〉

この資料は高さ15・3㌢、三角錐（すい）の頂部が二股に分かれ、腕のように前方に張り出した形をしている。腕が伸びる方向の逆側には、つまみ出した突起がある。三角錐の中は空洞で、一見すると土偶や埴輪（はにわ）のようである。しかしよく見ると側面の一部が黒く焦げている。いったい何だろうか。

これらは「土製支脚（どせいしきゃく）」あるいは「支脚形土器」と呼ばれている。土製支脚という名前は、考古学者の小林行雄が1941（昭和16）年「考古学雑誌」に掲載した論文で名付けたものだ。それ以前は「犬埴輪」などと呼ばれ、生き物を象形したものとみなされていた。

上部の二股の部分を耳に、その間のとがった部分を顔に見立てたらしい。表面に火を受けた痕跡があることや、焦げた土器と一緒に出土する事例が確認されたことなどから、次第に炊事具と考えられるようになっていった。

支脚は字のとおり「支える脚」だ。使い方は国内や中国、東南アジアの出土事例

掲載許可番号：d20230301-04